Jour. of Musashi Sociological Society, 7, 191~216, 2005
「ソシオロジスト」(武蔵大学社会学部), 7, 191-216, 2005

祭礼の変容と地域社会

—福山市内海町の事例から—

Changes in Rural Festivals and the Rural Community in Fukuyama City, Hiroshima Prefecture

武　田　尚　子*

Naoko TAKEDA*

要約：本稿は，広島県福山市内海町（田島と横島の2つの離島から構成される）の町地区を調査対象地とし，1980年代に氏神神社の祭礼に生じた変化を通して，地域社会における「Social Capital」「人と人との関係性の資源」の形成過程について考察した。

1984年に田島の町地区では，神輿渡御に際し，隣接する横島地区と神輿ジョイントを実施した。異なる自然村どうしの間で，神輿渡御の合同イベントの企画が実現するのは，稀なことである。この2年前から町地区では，祭礼に特化した機能集団が結成され，地域自治会とは距離をおいて活動していた。当時の地域自治会役員層の祭礼運営の方針とは相容れない神輿ジョイントのアイデアは，この機能集団によって実行されたものであった。機能集団のこの行為は，祭礼慣行を遵守する地域自治会役員層の発想とは乖離するため，この行為をどう評価すべきか，その解釈をめぐっては不安定な要素があったが，機能集団の存在や行為は，次第に地域社会の支持を得ていった。現在では，地域行事の実施にあたって，この機能集団の協力が欠かせない状況になっている。

集落コミュニティが担う機能の中で，祭祀慣行は最も変化しにくいものである［鈴木広 1975：127］。このような伝統的な集落の発想をこえる行為の出現を支えた仕組みを明らかにするために，機能集団の中核的人物のライフ・ヒストリーを分析した。その結果，中核的人物は青年の頃から，離島に生きる者としての生き方を模索し，複数のアソシエーション集団の活動に活発に関わることによって，「人と人との関係性の資源」を形成・蓄積してきたことがわかった。また，神輿ジョイント実現にあたっては，自営業主層のネットワークを活用することによって，異なる自然村との間の合同イベントを実行できたことが明らかとなった。

このようにライフ・ヒストリー分析を用いることによって，中核的人物が，アイデア実現のため重要な資源となった「重要な他者」を身辺に獲得し，配置

*武蔵大学専任講師

していった過程について，時間的パースペクティブ，空間的パースペクティブをとりいれて考察することができた。つまり，パーソナル・ネットワーク分析でいうところのエゴのパーソナル・ネットワーク形成が，地域社会における「Social Capital」「人と人との関係性の資源」に深化していく様相をとらえることができた。このように，本稿は祭礼が変容する過程を通して，個人史と地域社会構造の連関を解明し，記述する方法を模索してみたものである。

1. はじめに

地域社会でとりおこなわれる祭礼は，地域住民のまとまりを自他ともに示す機会でもある。また，個人が非日常の楽しみや開放感，時間の循環を実感する機会にもなる。このように地域社会の祭礼は，多様な機能を担っていると言われる。その一方で，祭礼の挙行には，経済的資源，人的資源，時間的資源などの負担がかかる。そのため，コスト負担のあり方をめぐって，祭礼の実施形態や運営組織の構成に変化が生じることもある。祭礼には地域社会の状況が反映される。地域社会が変化するに従って，祭礼も動態的に変化している。

地域社会で催される祭礼には，村落社会における祭礼と，都市社会における祭礼がある。祭礼の変容過程について，実証的な研究が蓄積されてきたのは，主に都市祭礼の領域である[1]。都市においては，人口増加や，再開発の進行によって，地域社会に新規来住者が流入してきた。地付層と新規流入層との葛藤や，社会的統合の方向をめぐって，多くの祭礼に変化が生じた。地付層が祭礼の中核の儀式運営に固守する場合，新規流入層の参加が可能となるように，祭礼行事に付加的要素（新たなアイテム）が加えられ，調整がはかられることもあった。また，都市的生活様式の浸透にともなって，生活の個人化が進行し，祭礼への参加形態も，一時的な縁を特徴とする「合衆型」が広まった［松平 1990］。このように，都市の祭礼に多くの関心が示されてきたのは，都市に人口が流入し，都市の祭礼がダイナミックに変化してきたという現実の社会的状況があったからである。都市

の祭礼の研究では，人口が増加し，拡大・成長する都市というモデルを前提として，変容の過程が分析されてきたといえる。

一方，村落においては人口流出が一般的な趨勢であった。村落社会が変化していく中では，祭礼や伝統行事が維持できるかどうかが懸念された。そのような状況においては，祭礼に新たなアイテムが加わることは一般的ではなかった。また，祭礼や伝統行事の復活が語られる場合も，地域社会の衰退をくい止め，地域活性化をはかるという視点からの関心であった[2)]。このように村落の場合は，人口の流出，産業の衰退といった現実を前に，祭礼や伝統行事の存続・衰退のありようが関心の焦点になっていた。拡大・成長する都市モデルとは対照的な状況があった。

このように，都市と村落では，祭礼をめぐる現実の社会的状況も，研究上の関心のおきどころも異なっている。しかし，少子高齢化が進行中の現在，都市においても人口減少地区が出現している。拡大・成長する都市モデルが活用できる時代ではなくなっている。またこれまで，村落において，祭礼の運営や実施をめぐって，新たな工夫や試みが出現しなかったわけではない。拡大・成長する社会のモデルとは異なる観点で，祭礼の変容過程の分析方法と解釈のありかたを検討することが必要である。強いて表現すれば，人口減少・再編成型社会における，祭礼の変容過程の分析方法ということになる。

本稿はこのような関心に基づいて，分析の事例として，村落社会における祭礼を取り上げる。そして，人口減少・再編成型の地域社会における，祭礼の変容過程の分析方法について検討し，変容の意味について考察する。

2.　先行研究の検討

村落における氏神崇敬について，鈴木榮太郎は，「氏神の神社は自然村の象徴である」，「村のうちでの公の事は，第一にそして大部分，氏神に関す

ることであったように思われるのであるから，氏子たる事が即ち村人たる事と同義に解され得たのは当然である」と述べている［鈴木榮太郎 1940＝1968 II：421］。自然村たる所以は，「村の精神」が存在することである。「村の精神」とは，氏神の氏子としての自覚のもとに，一体感が醸成され，生活規範が形成され，尊重され遵守されている，そのような状況を存続させている社会意識のことである。つまり，自然村理論は，氏神神社を地域社会統合の要としている。当然のことながら，氏神神社の祭事は，地域統合を象徴的に表すもので，「祭礼は村の最大の行事で個人の私事ではない。村人は氏子としてみな参加する。祭儀に参加する事は村人の最小限度の義務である」［鈴木榮太郎 1940＝1968 I：333］ということになる。氏神神社の祭礼をめぐる規範は，地域社会の中では最も強く効いている規範の一つであったのだろう。鈴木広は，離島の集落コミュニティを調査した経験から，部落機能として，つねに最後に変化するのは祭祀慣行と消防組織であると述べている［鈴木広 1975：127］。

このように，祭礼や伝統行事の第一義的機能は地域統合機能であるとされてきた。しかし，高度経済成長期以後の村落を調査した渋谷美紀は，地域統合機能の効果が確認できなかった事例を報告している［渋谷 2000］。調査対象は，岩手県の大字集落（自然村）の小正月行事である。集落には伝統行事の運営と相互扶助の 2 つの機能を担う機能組織（ほぼ全戸加入）があった。この機能組織が核となって，高度経済成長期には衰退していた伝統行事を，高度経済成長期後に復活させた。「集落でまとまる機会が必要」と感じた集落の有力者がいたという。渋谷の調査項目は，行事運営の財政基盤，行事運営の労力提供者，演技者，観客の 4 点である。調査の結果，伝統行事復活に積極的な一部の住民に負担が集中していた。集落内部での結集・交流の機会が増えているわけではなく，連帯意識の醸成に結びついているわけでなく，地域統合機能も果たしていなかった。広域化した行政単位の中で，この集落がかつての自然村としての単位であったことを集落内部に認知させるシンボルとしての機能が確認できただけであった。

この事例では，行事には中断の時期があったものの，運営組織は集落内で存続していた。そのため，調査の関心は集落内部（従来の自然村）の運営組織に集中し，調査範囲は自然村内に留まっている。人口流出が続く村落社会では一般的に，運営を支える人的資源が限定されている。自然村を母体に，祭礼・伝統行事が実施されていても，行事存続に関わる資源が，自然村外から調達されている可能性もある。例えば，この事例では，人的資源が限定されていることを承知の上で，復活を企画する負担を辞さなかった人物の行動やエートスが，どのような社会的状況の中で出現し，支えられているのか，という視点から分析する方法もあったと思われる。

人口減少が続き，少子高齢化が進行している地域社会では，拡大・成長型社会と同じ指標で地域統合のありかたをはかると，人的資源が少ないがゆえに，縮小・衰退傾向しか捉えられず，そこに生じている活動の社会的な意義をとらえそこなう可能性がある。また，このような社会では，地域活性化の実現や持続は相当に困難である。拡大・成長型社会とは異なる視点からの分析を行い，生起している社会的活動の意義を考察することが必要である。

渋谷の事例では，具体的な調査方法としては活動に積極的な一部の住民に詳細なライフ・ヒストリーを聴き取るという方法があったと思われる。経済的資源以外に，活動を支える資源としてどのようなものがあるかを明らかにするためである。このような限定された社会環境の中では，活動が消滅せず，持続していることの意味は大きい。小内純子は，村落における生産に関わる住民活動を分析する際に，コールマンの「Social Capital」，金子郁容の「コミュニティの関係性の資源」という概念を援用して，「人と人との関係性の資源」という概念を用いている［小内 2002］。祭礼行事についても，限定された状況での活動を支える「Social Capital」，「人と人との関係性の資源」がどのように形成され，資源となり得ているかを明らかにするという分析視角がありえよう。

また，祭礼・伝統行事の分析では，活動に関わる運営集団をどのように

捉えるかという問題がある。鈴木榮太郎は自然村の集団累積状況について，氏神神社の祭礼を担う集団として，氏子集団を挙げている［鈴木榮太郎 1940＝1968 Ⅰ：330-335］。鳥越皓之は，地域自治会と氏子組織の関係について，次のようなことを述べている。住民組織に「オヤコの原則」とでもいえるようなものがある。地域自治会が担う特定の機能の中で，当該地区で大変重要であることが認知されると，オヤである地域自治会から飛び出し，コとして新しい機能集団を形成する。しかし，それがさほど重要でなくなると，コは再びオヤの組織に戻ってきて，その一機能と化してしまう。かつてはコとして自立していた氏子組織も，オヤである地域自治会に吸収されてしまうことがある。一方，祭礼が復活される場合にも，コとして固有の機能集団が形成され，地域自治会はオヤとして援護する役割を担う場合がある［鳥越 1994：30，63-64］。渋谷の事例では，行事の存続に関与している集団は一つにとどまっていた。しかし，実際に祭礼が変容していく際には，複数の集団が関与している場合がある。そのような際に，集団関係を動態的に考察する方法を，鳥越は示唆していると言える。

3. 本稿の分析視角と調査方法

本稿では，行政的には市部に編入されているが，村落社会的性格をとどめている大字集落（自然村）を調査対象地とする。この集落の氏神神社の祭礼には，高度経済成長期以後にある変化が生じた。地域自治会とは異なる機能集団が出現し，新たな展開を導き出した。人口減少・再編成型の地域社会では，そのような機能集団が出現するということ自体が貴重で，活動の持続には都市とは異なる負担がともなう。本稿では，祭礼を通して，限定された状況での活動を支える「Social Capital」，「人と人との関係性の資源」の内容と，その形成・蓄積の過程について考察する。

そのために，機能集団形成の中核となった人物に詳細なライフ・ヒストリーを聴き取るという方法を用いた。「人と人との関係性の資源」の形成過

程について明らかにするには，調査対象者のライフステージを遡り，行動への動機づけやエートスが，どのような状況のもとで育成されてきたのかをさぐることが必要である。探索的要素を含んだ調査にならざるを得ない側面がある。そのためには，調査対象者・集団について，多様で豊富な情報を得ることができるライフ・ヒストリー分析が適している。プラースは，ある人物のライフコース上，行動や選択に方向性を与え，ライフコースの展開に関与するような深い関係性をもった重要な人物や人物群を道づれ（convoys）という概念でとらえている［Plath 1980］。本稿では，中核となった人物の行動やエートスの育成されてきたコースを考察するために，「convoys」を「重要な他者」・「同伴者」として表記し，中核的人物と関わる出来事について，これらの人々（convoys）のライフ・ヒストリーの一部を記述する。「中核的人物」および「重要な他者」・「同伴者」のライフ・ヒストリーを用いて，その関連の様相に焦点をあてることによって，「人と人との関係性の資源」の形成過程について，より深くとらえることができる。「重要な他者」を獲得するとは，パーソナル・ネットワーク分析でいうところの，エゴが目的実現のために，最適スターをエゴにより近いゾーンに配置し，関係資源として活性化させることである［森岡 1979］。ライフ・ヒストリー分析の利点は，エゴがゾーン内のスター配置に変更を加え，資源化していく過程について，時間的パースペクティブをとりいれて考察することができることである。

調査は，2004 年 9 月に，中核的人物（S.K. さん）と，重要な他者・同伴者である 2 名（M.S. さん，W.H. さん）を対象にそれぞれライフ・ヒストリーの聴き取り調査を行った。また，2004 年 7 月，10 月に調査対象地区で行われた 2 つの祭礼を参与観察し，かつ機能集団と地域自治会との関係について，関係者に聴き取り調査を行った。また，過去の祭礼については，調査対象地区の人々が所蔵していたビデオ，写真などの映像資料を視聴し，実施状況について確認した。

以上をまとめると，本稿の目的・方法は，祭礼を切り口とし，複数の人

物のライフ・ヒストリー分析によって，人口減少・再編成型の地域社会における，「Social Capital」「人と人との関係性の資源」の形成過程について考察することである。また，このような地域社会の現状をふまえ，地域社会統合について，現在どのような視点で考察することが可能かということについても考えてみたいと思う。

4. 調査対象地の概要

調査対象地は，広島県福山市内海町の「町」という名称の集落である。内海町は瀬戸内海に浮かぶ田島と横島という2つの離島から構成されている。1955年（昭和30）に田島村と横島村が合併して，内海町ができた。その後，2003年（平成15）に福山市と合併した。田島と横島は距離的に近接している。そのため，1951年（昭和26）に両島の間に，睦橋という名の橋が架けられた。この橋は船の通過に合わせて開閉する橋であった。1979年（昭和54）に高度が高い新造の橋に架け替えられた。橋を開閉しなくても，その下を船が通過できるようになった。町地区の祭礼が新たな展開を見せたとき，新造の橋がその舞台となった。

田島には5つの大字集落があり，その1つが町地区である。5つの大字集落は海岸にそって点在している。田島側の睦橋のたもとにあるのが町地区である。5つの大字集落にはそれぞれ氏神神社があり，別個に祭礼が行われている。ただ，大浦地区にある神社は，田島全体の村社も兼ねている。各集落には地域自治会が構成されている。このように田島には，5つの自然村があり，その一つが町地区ということになる（図1)。

それに対して，横島の場合は，集落は1ケ所に集中している。そのため，集落の規模は大きいが，地域自治会は1つで，内部が11の区に細分されている。神社も1つで，村社である。11の区から宮総代を合計8名出している。祭礼の時期は10月である。

2000年時点で，内海町の人口は3,431，世帯数は1,270である。1960年か

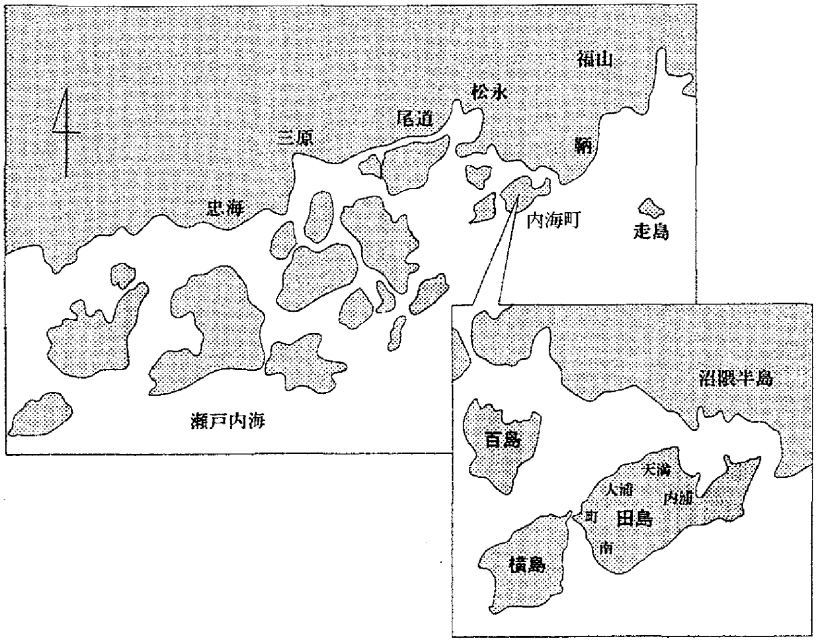

図 1　広島県瀬戸内沿岸地域地図と内海町地図

表 1　内海町の人口・世帯数　（出典：各年度国勢調査）

	1947	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
人口総数	9416	9358	8001	6872	5880	5273	4680	4241	4013	3738	3706	3431
男性	4284	4408	3775	3192	2686	2399	2159	1977	1857	1710	1686	1552
女性	5132	4950	4226	3680	3194	2874	2512	2264	2156	2028	2020	1879
世帯数	2048	1947	1794	1633	1573	1571	1505	1439	1369	1322	1333	1270

ら 2000 年の間に人口は半減している（表 1）。2001 年の高齢化率は 37.0% である。調査対象地区である内海町の町地区については，2002 年の人口は 388（男性 180，女性 208），世帯数は 154 である。また，内海町の労働力人口についてみると，1995 年の第 1 次産業就業者 16.2%，第 2 次産業就業者 33.5%，第 3 次産業就業者 50.2% となっており，第 3 次産業・第 2 次産業

就業者が中心である。本土の沼隈半島と内海町・田島との間には，1989年(平成元)に内海大橋が開通した。本土の福山市，尾道市，沼隈町に通勤する労働人口も多い。

5. 町地区の祭礼とその変容

町地区は，田島の西部にあって，瀬戸内海交通の要衝に位置している。江戸時代から，商業集落であった。集落には山王社という氏神神社がある。山王社の祭礼は，人の交流が活発な商業集落の性格を反映していたためか，戦前まではたいそう賑やかであった。戦前の祭礼の様子については，文献資料に次のように記載されている。

山王さんの祭りは田舎では珍しい夏祭りである。この祭りは京都や大阪のまねをしたということではない。昔，そうがい船と言って（捕鯨船の前身）八月より翌年四月まで，長崎の五島方面に鯨を捕りに行ったもので，秋には男たちが居ないので，六月十三日から十五日まで三日間大祭りとして騒いだものである。(中略) 空地には造物と言って，歌舞伎芝居で馴染の舞台面を仮設したり，お宮の境内では旅商人の出店やら，ほととぎすや金色夜叉ののぞきも来る。各家には高張提灯を軒に吊して大ぜい客を招いて騒いだものだ。(中略) 町の祭りと言えば近郷では珍しいにぎやかな祭りで，見物人も沢山来たもので，鞆警察分署からも巡査が応援に来たものである。又この神輿を担ぐ若衆の腕ぬきは，思い思いの趣向をこらして造り立派なもので，これを娘さん達から贈ったものである[3)]。

この集落では，江戸時代に西海捕鯨業に出稼者を送り出していたため，出稼者が帰ってきて在島している旧暦6月が祭礼の時期であった。祭礼の時に催される芝居は，江戸中期から有名で，芝居のための回り舞台が境内に常設されているほどであった。祭礼の運営は，自治組織である町組が担当していた。町組は芝居公演のための衣装を3組も所有しているほどで，

この衣装の管理もすべて町組総代が担当していた[4]。このように，山王社の祭礼は戦前までは賑やかであった。

戦後になって，祭礼には2つの大きな変化が生じた。1つは神輿を担ぎあげることができなくなったことである。この変化は1961年（昭和36）頃に生じた[5]。高度経済成長期に若年労働力の島外流出が加速し，神輿の担ぎ手が不足したことが原因であると言う。これ以降，1981年（昭和57）に再び神輿を担ぎあげることができるようになるまで，20数年間にわたって，神輿は台車に載せて引っ張られていた。

もう1つの変化は，祭礼の時期の変更である。旧暦6月から，10月に移行した。この変化も昭和30年代から40年代にかけて起こった。祭礼の時期は，自然村の1年間の生活リズムに関与する重要な時間の節目である。集落の時間体系に変化が生じたことは，集落の人々の生活構造が大きく変化していたことを表している。高度経済成長期には日本各地の多くの祭礼に変化が生じた。町地区の祭礼も同様であった。

この状況がさらに変化したのが，1982年（昭和57）のことである。町地区の有志が発案して，神輿の担ぎ手を募った。これが成功して，翌年に神輿を担ぐことを目的とした機能集団（ホタテ会）が結成された。これ以降今日に至るまで，神輿を担ぎあげることは継続されている。

機能集団が結成された2年後の1984年（昭和59）には，田島・横島の間の睦橋の上で，町地区の山王社の神輿と，横島の村社の神輿のジョイントが行われた。神輿渡御の時間を調整し，同時刻にそれぞれの島側から神輿が橋をのぼり，橋の頂上で2つの神輿が練り回しあい，ぶつかりあうという催しである。それぞれの集落は自然村である。自然村の氏神神社の神輿を用いてイベントの同時共催が実現するというのはかなり画期的なことである。しかも，田島と横島は1955年（昭和30）に合併して1つの行政単位となったとはいえ，田島と横島では住民の生活慣行，気質・気風は非常に違う[6]と，現在でも両島の多くの人が言う。隣接する自然村は入会地や入浜の境界をめぐって争いや，張り合うことが多かった。田島と横島の間で

も江戸期以来そのような争いが繰り返され,「田島の田なし」「横島の夜なし[7]」と相互に非難しあう常套表現も両島では人口に膾炙しているほどである。そのような間柄の自然村であったのだから,最も伝統的な規範に拘束される祭祀慣行に,共同行為が出現することは通常は予測しがたいことであった。

以上が町地区の祭礼の戦後の変容過程である。最も顕著な変化は2点である。1点は従来は地域自治会が担ってきた祭礼運営に,機能集団が出現したことである。もう1点は,他島の自然村との共同行為という新しいアイテムが出現したことである。1980年代に入って祭祀慣行に生じたこれらの変化は,地域社会のどのような状況を反映したものだろうか。氏神神社には異例の,他島の氏神神社祭礼との共同行為は,どのような状況の中で実現可能になったのであろうか。機能集団の形成も,他島との共同行為も,個人の力で実現できるものではない。集落コミュニティが持つ機能の中で,変化が生じるのが最も遅い祭祀慣行に,2つの大きな変化が発生した背景には,複数の人間の行動が連関し,「Social Capital」,「人と人との関係性の資源」の形成・蓄積があった。祭祀慣行に生じた変化を「祭礼の復活」という範疇に括ってしまう前に,「中核的人物」と,「重要な他者」・「同伴者」のライフ・ヒストリーを重ね合わせながら,「人と人との関係性の資源」が形成されていく過程と,祭礼の変化が表している社会的意味について考察してみよう。

6. 中核的人物—S.K.さんのライフ・ヒストリー[8]

S.K.さんは,神輿を担ぐことを目的として出現した機能集団・ホタテ会の初代会長である。横島の神輿とのジョイントもS.K.さんの発案であった。S.K.さんは2つの変化の立役者である。祭礼に関しては革新的な発想の人物であるといえる。このような革新性はどのような生活史のなかで育成されてきたものであろうか。S.K.さんの家族史,社会活動歴,機能集団

の発足，神輿ジョイント実現の協力者，地域社会の反応の5点に着目して，ライフ・ヒストリーを記述し，考察を加える。

(1)　S.K.さんの家族史

S.K.さんは1946年（昭和21）に町地区で生まれた。1965年（昭和40）に高校を卒業後，京阪神へ就職したが，数ヶ月で帰島した。父が町地区で家電販売店を営業していた（のちに電気設備工事も兼業）。長男は家業を継ぐものという規範に疑問を感じることなく，帰島直後から，父と共に家業に専念した。つまり，S.K.さんは地元出身の自営業主層である。

父は福山市内の出身である。戦争中に福山で空襲に遭い，田島で家電店を開業することになった。S.K.さんの母方の祖父は町地区出身者である。しかし，母方祖父の職業経歴・居住経歴は，長期間田島から離れたものであった。母方祖父は，戦前に大阪で鉄工所を営んでいた。廃業後，一家で台湾や北海道・紋別へ渡航した。母方一家が田島に落ち着くようになったのは，戦争中である。つまり，戦前は，町地区に親族ネットワークは保有していたものの，生業の基盤を形成していなかった。戦後は，家業が順調に発展し，島外へ移動する必要がなく，長男のS.K.さんを地元に回収できている。以上のように，S.K.さん自身は地元定着層といえるが，家族史をみると，2世代前から第1次産業を離脱しており，家族の地域移動範囲もかなり広域である。地元だけでは完結しない広域にまたがるネットワークを保有していた家族といえる。

(2)　社会活動歴―「重要な他者」・「同伴者」W.H.さんの獲得

S.K.さん自身は，高校在学時に，神輿について次のようなことを試みたことがある。高校2・3年生だった昭和38・39年頃，担ぐことができなくなっていた神輿の現状をみて，高校の同級生だった横島出身者数人に声をかけ，神輿を共に担いでもらう約束を取り付けた。祭礼の運営にあたっていた町組総代にこの計画を相談したところ，「他地域の者に神輿を担がせ

ると，けがれる」と一刀両断に撃退された。S.K. さんは神輿や地域のことにある程度関心がある青年であったと思われる。

S.K. さんのライフ・ヒストリーで特徴的なのは，高校卒業後，アソシエーション集団で地域活動の経験を積んでいることである。熱心に参加した団体活動は2つである。1つは，広島県離島振興青年懇話会という離島青年のリーダー研修的組織であった。田島の大浦地区出身の W.H. さん（内海町役場勤務）が，この会合に熱心に参加し，S.K. さんも常に同伴した。5歳年上であった W.H. さんとの間に信頼も形成され，率直に意見を交換できる関係になった。S.K. さんはこの活動を通して，身近に W.H. さんという良き先導者を持つことになった。社会活動経験という点で，W.H. さんは S.K. さんの「重要な他者」・「同伴者」（convoys）である。

もう1つは，内海町全域の青年を対象として結成されたサンゴ会という親睦団体である。離島振興青年懇話会に出席した W.H. さんが，他島の青年活動から刺激をうけて，発起人になり，1966年（昭和41）に結成した。島に残った内海町青年が集い，一緒に活動する機会を作ることが目的であった。集合体になって美しく光ろうという願いをこめて，サンゴ会と名付けられた。規約も作られた。田島・横島では，昭和20年代末または30年代はじめまで，各集落で青年団の活動が行われ，盆行事などを取り仕切っていた。しかし，青年層の島外流出の影響のため，昭和41年頃には，内海町のどの地域でも青年団活動は無に等しい状況になっていたという。つまり，サンゴ会は，内海町に留まった青年層をリクルートして，新たに組織化されたアソシエーション集団である。旧来の青年団活動とは異なる社会的文脈の青年活動である。S.K. さんは，結婚して子どもが生まれるまでの約5年間，この会の活動に熱心に携わり，会長も務めた。

サンゴ会への参加者は，田島・横島の両島にまたがり，最盛期は40～60人の青年が参加した。女性メンバーが半数を超えていた。任意加入であったが，青年がいると聞けば，S.K. さんたち役員が勧誘に行った。活動内容は，キャンプ，茶道・華道，バンド活動など，娯楽・教養活動が主であっ

た。バンド活動では，島の各集落の敬老会で1日に4回公演したこともある。田島ではかつて各集落で，「演芸会」という住民の娯楽・慰労の会が開催される習慣があった。サンゴ会は，この「演芸会」の復活にも取り組んだ。昭和43・44年頃，両島にまたがる大きな演芸会の開催にこぎつけ，両島の住民に大変喜ばれ，寄せられた御祝儀がかなりの金額に達した。各種の活動の講習会・練習で，役員は週4日は余暇時間をさく必要があり，結婚すると時間的に厳しくなるため，活動から退いた。

会が発足した当初は，適当な会合場所がないことにも苦慮した。W.H.さんが内海町の職員であったにも関わらず，青年たちの活動は当初，地域社会からは怪訝な視線でみられ，「行政の理解がない」と感じられることもあった。しかし，活動の実績が積み重なるにつれて，行政も認知するようになり，社会教育団体として登録するよう勧められ，補助金の交付対象にもなった。サンゴ会そのものは，1971年（昭和46）にS.K.さんが結婚して，活動を引退した後，数年で自然消滅した。

サンゴ会の展開過程は次のように整理できる。当初は任意の青年達による娯楽・教養中心の自己充実活動であった。しかし，地域社会との接点を求めて，活動を展開させ，実績を積んだ結果，青年層の活動として，社会的に承認され，地域住民の社会生活を豊かにする活動へと展開していった。

この会の地域活動は内海町全域を対象としていた点に特徴がある。各集落の地域自治会役員層とは，年齢的にも相当の開きがあり，役員層は因襲的だと感じられた。そのため，各集落の地区行事運営に会として協力することはなかった。むしろ，地域自治会とは離れて，自由な活動を展開できることが魅力的であった。

S.K.さん自身にとって，次のような点にも活動の意義はあったと考えられる。この当時田島と横島にはそれぞれ中学校があって，両島の青年は出身中学も異なっていた。また，島外への若年層労働力の流出も加速しており，同じ集落出身者であっても，年齢が2〜3歳離れれば，人柄・性格につ

いて熟知しているわけではない。会の活動は，島に留まった青年の間でネットワークを形成し，相互信頼を育てる機会になった。また，若年者にとって，自分の出身集落以外の他の集落の状況は意外と知りにくいものである。活動で知り合った他集落出身の青年たちに導かれて，個々の集落に入ることによって，地域社会に対する理解が深まっていった。

このように，昭和40年代に島外への若年層労働力の流出が加速する中，離島に留まることを選択した青年たちは，町内全域をカバーするネットワークやアソシエーション集団を形成し，離島に生きる者としての生き方を相互作用を通して模索していた。S.K.さんは，W.H.さんという「重要な他者」・「同伴者」を得て，身近に社会活動経験を積んでいく際のモデルを保有することになった。「中核的人物」が社会的活動を継続していくため，エートスを維持・保有できる環境は重要である。S.K.さんのライフ・ヒストリーは「中核的人物」が重要な資源を身辺に配置していく様相を示している。

(3) 機能集団の発足

1982年(昭和57)に山王社の神輿再び担ぎあげようという動きが起こった。当時40歳で，建設会社従業員であったM.M.さん(町地区居住者)が声かけ人であった。この年，町組総代が突然死亡した。町組(地域自治会を町地区の人は現在でもこの名称でよんでいる)の総代は，推薦人がいて，推挙されて決まっていくという仕組みである。M.M.さんが推薦人であったため，残りの任期期間をM.M.さんが総代代行を務めることになった。M.M.さんは担ぎ手になりそうな30代と20代男性をひとりひとりリクルートしていった。関係者にとっても意外なことであったが20数名が賛同し，担ぎあげることに成功した。町組で担ぐことが中断して20年余経過していた。担ぎ手となったのは，これまで担いだ経験がない世代であった。再び担ぎあがった神輿に，町地区住民が非常に喜んでいることが担ぎ手たちにも実感された。祭礼終了後，担ぎ手たちは町平愛信保存会(別名：ホ

タテ会。「帆を立てる」と，貝のホタテの掛け詞，）を結成し，S.K. さんが会長となった。つまり，神輿担ぎに特化した機能集団が発足した。M.M. さん自身は担ぎ手には入っていなく，ホタテ会のメンバーには入らなかった。

偶然ではあるが，地域自治会の運営が一時的に異例に若い人が担う事態が生じ，機能集団の結成につながっていった。自治会の役員である M.M. さんは機能集団に参加することをむしろ避けたため，自治会とは独立した形態で，機能集団が発足した。この後，祭礼や地区行事の運営にあたって，自治会と機能集団が協力関係を結び（後述），現在に至っている。

(4) 神輿ジョイントの実現と地域社会の反応

機能集団が結成された 2 年後の 1984 年（昭和 59）に，S.K. さんと横島の自営業主 M.S. さんの間で，神輿ジョイント案が持ち上がった。共に商工会青年部のメンバーであった。アイデアの源泉は御神体にまつわる伝説である。対岸の沼隈町の常石八幡宮の御神体を分割して胴を祀っているのが横島の村社，手足を祀っているのが町地区の山王社という伝説である。M.S. さんが経営する喫茶店で，2 人が「どうやると祭りが盛り上がるか」と雑談しているときに，このアイデアが生まれた。分割されている両者の御神体を橋の上で合わせることによって，両者の祭礼を盛り上げるという案であった。横島の神輿も担ぎあげられなくなってから 20 余年経過していた。アイデアが出て，M.S. さんは横島でも機能集団である祭り保存会（後述）を立ち上げ，担ぎ手を募った。

S.K. さんは実行にあたっては，町組役員には相談しなかった。正式に話を持っていったら，断られると判断した。神輿は担ぎあげられると，勢いが出るので，その勢いを利用して，橋を上がってしまうことが最も実現可能な方法だと思われた。ホタテ会の担ぎ手の間ではこの企画は了承されていた。町地区住民の間では，神輿が通常のルートをはずれて，橋の上にあがるらしいというううわさが広まっていた。当日，実際に神輿が橋の上にあ

がっていこうとしたとき，町組役員の一人は応援したが，その他の役員は制止する動きをとった。また，横島の担ぎ手が応援に走ってきたが，町組総代に「さわるな。他の地域の者がさわるとけがれる」と突き飛ばされた。しかし，勢いがある神輿を止めることはできず，神輿のジョイントが実現した。

横島の神輿と張り合うイベントが眼前に展開して，それぞれの地区の応援も熱が入り，担ぎ手，観客双方が満足感，充実感を実感した。その結果，御祝儀が多数寄せられた。この年の成功をうけて，翌年 1985 年（昭和 60）には，さらに趣向に工夫を凝らした。山王社の神輿はかつて雄壮な海上渡御をおこなっていた。それを一部再現するアイデアであった。横島の神輿が橋の上を渡御しているときに，田島の神輿は海上を渡御し，橋の下を船で通過する，というものであった。この年は，神輿を船に載せるため，あらかじめ町組総代の許可を得た。祭礼終了後，慰労会用の費用は受け取ったが，町組役員の慰労会に同席するように誘いをうけることはなかった。

町地区には山王社の他に，天神社という小さな神社があり，町組が管理している。1986 年（昭和 61）には，ホタテ会メンバーの間で，天神社祭礼にも協力しようという話になった。祭礼は毎年 7 月 24 日であった。土・日であれば，被雇用者の多いホタテ会のメンバーも協力できるので，町組総代に相談したところ，日程は不変ということで断られ，実現しなかった。

(5) 考察—祭礼の変容過程

以上の経過から，地域自治会と機能集団の関係について，次のような知見を得ることができる。神輿ジョイントは，機能集団が，地域自治会の承認を受けることを回避し，実力行使することによって実現した。総代の「けがれる」という発言にも明確に示されているように，地域自治会の運営集団には自然村的な祭祀慣行を遵守する規範が強く保有されていた。規範を遵守することによって，自然村的リーダーの役割を達成し，地域統合を維持するという行動様式であった。

それに対して，発案者が重視したのは，イベントとしての盛り上がりである。自然村的祭祀慣行を神聖視する発想はない。担ぎ手，観客（地域住民）がともに盛り上がる，つまり共同行為による共同感情の湧出を導くような機会を創出する必要性を感じている。意外性を演出することによって関心をひきつけるイベント，旧来の自然村の対抗意識を利用しての応援など，これまでの自然村の祭礼にはない要素も作り出された。自然村内部での装置や資源に限界があるため，他島の自然村の資源を活用して，共同感情の湧出を導いたといえる。「ミル・ミセル」（松平 1990）に関心がなかった地域自治会運営集団に対して，「ミル・ミセル」要素の重要性を主張したと言うこともできよう。この方向性に対して，地域住民は，喜びや御祝儀というかたちで，同意を示した。地域自治会の運営集団は，その現実を無視することができず，機能集団の役割を承認せざるを得なくなった。しかし，地域自治会役員層は機能集団と一緒の共同飲食の機会を拒否し一線を画している。

以上のように，観客の承認を媒介として，機能集団の行動についての解釈が確定していった。機能集団が選択した行動は，自然村の祭祀慣行とは相容れないものである。つまり，行動の正統性には不安定要素があった。しかし，地域社会には観客という立場の地域住民もおり，「観客」からは賛同が得られていった。このように，機能集団の存在と行動についての解釈には当初不安定なものがあったが，地域住民に支持されることによって，地域社会の中で確定していったのである。

7.　重要な他者・同伴者—M.S. さん[10] のライフヒストリー

神輿ジョイント実現にあたって，横島の自営業主 M.S. さんは，S.K. さんにとって「重要な他者」・「同伴者」である。M.S. さん側には，地域社会集団との葛藤はなかったのであろうか。横島側の状況について，M.S. さんのライフ・ヒストリー中の一部を記述し，考察を加える。

(1) 横島の地域社会と機能集団

M.S. さん(1944 年=昭和 19 年生まれ)が神輿ジョイントに賛同したのは次の 2 つの理由に基づく。1 つは横島住民の村社への関心の薄れ方に危惧を感じていたことである。「みんなを祭りに引っ張り込むにはどうしたらよいか」に関心があった。M.S. さんの父も,妻の父も,横島村社の宮総代をつとめたことがあったため,M.S. さんは,村社や宮司に親近感を抱いていた。京阪神地域から U ターンした宮司は発想に柔軟性があった。古くなった神輿新調のため寄付金集めを試みたが,集まらず失敗したこともあり,M.S. さんにこの悩みを吐露したこともあった。もう 1 つの理由は,町地区で再び神輿を担ぎあげることが可能になったことに羨望感を感じていたことである。横島でも昭和 38・39 年以降に神輿が担ぎあげられることがとまっていた。町地区と横島の祭礼は同日である。担ぎあげることができる地区とできない地区の差がきわだった。かつて横島でも,祭礼時には出郷者も帰郷した。いつしか,その習慣が消えたことも残念であった。

S.K. さんと立てたジョイントの企画を実行に移すため,M.S. さんは,横島側で祭り保存会という機能集団を立ち上げた。会員を 40 人程度集め,10 人程度が実行委員となって中核グループを形成し,M.S. さんが会長となった。中核グループは,自営業主や役場勤務の公務員などであった。地域住民の関心をひきつける効果があると考えたため,宮司も賛同した。宮総代たちも,祭礼に対して強くこだわる状況ではなかった。宮司から宮総代を通して相談があったときも,反対はなかった。担ぎあげた経験者がいないため,不安があり,M.S. さんたちは祭礼の前に,担ぎあげる予行演習も行った。

祭礼終了後,地域住民の反響は大きかった。「神輿が再び担ぎあがるのを見て死ねるとは思わなかった」と涙を流して喜ぶ人もいた。神輿新調の寄付金を再び募ると,1 ヶ月で予定金額に達した。翌年,祭礼以外にも,神社でお神楽興行を実施し,賛同と御祝儀が多数寄せられた。M.S. さんは祭り保存会会長を 2 年務めた。その後,メンバーの 1 人が町議選に立候補した

ため，選挙の集票と絡んで，会の運営が複雑になり自然消滅した。

(2)　考察 —「重要な他者」・「同伴者」の獲得

横島では，祭礼の運営に対する宮総代の関心もうすく，氏子集団の弱体化という状況があった。そのため，機能集団の立ち上げや，自然村の祭祀慣行と相容れないアイデアに対して，強い反対が生じることがなく，氏子集団と機能集団の間に，葛藤や緊張関係は発生しなかった。

M.S. さんも S.K. さんも，ともに商工会の会員で，自営業主層である。神輿ジョイントの実現の背景には，自営業主層のネットワークが基盤にあった。商工会は，自然村を超えた行政単位（内海町）を基本としている。この 2 人が共通して活動し語り合う場が，もともと自然村を超えた枠組みのもとにあったことが，自然村の祭祀慣行にこだわらないアイデアが登場した背景として考えられる。空間的なパースペクティブから考察するならば自然村を超えた行政単位の同業者組織が S.K. さんの「重要な他者」・「同伴者」である M.S. さんの獲得の基盤にあったということになる。

8.　機能集団の活動の展開

町地区の神輿担ぎに特化した機能集団であるホタテ会は，神輿ジョイントの後，祭礼以外の地域行事の実施においても，地域社会に欠かせない存在に成長していった。

ホタテ会の中核メンバーは，現在 10 名程度の 40 代後半の男性である。会の性格は，任意の親睦グループで，各種行事には妻たちも協力している。S.K. さんは会長を 2 年務めてから，活動を退いた。現在にいたるまで会の活動は 20 余年にわたって存続している。任意のグループではあるが，町地区居住者を中心とした比較的若い層が集合していたため，これまで，内海町行政から，町政についての意見を求められたり，各種審議委員会の委員の委嘱が来たこともあった。

町政への意見を求められた際には，町地区の山の中腹にある「虚空蔵さん」という寺堂へ至る舗装道路をつけることを要望したことがあった。この寺堂は，町地区の高齢者の参詣場所の一つであったが，道路が舗装されていないため，参詣には不便であった。舗装道路が実現してのち，ホタテ会が協力して，地域自治会が春の花見会を開催した。それまでは，舗装道路がないため，大規模な花見会を開催できなかったのであるが，舗装道路開通以降は，行事開催時に娯楽となるカラオケ設備を運びあげることもできるようになり，夜遅くまで地域住民が憩う機会となった。花見会は地域自治会によって定期的に主催され，地域住民が期待する地域行事の1つとなった。ホタテ会の意見進言と協力により，地域住民にとって，社会的施設利用の利便性が高まった1つの例である。この他，地域自治会への協力という点では，町地区のもう1つの神社である天神社の祭礼は，ホタテ会が夜店を担当し，賑やかさを演出している。

地域自治会が関与しない，ホタテ会主催の行事として，とんど焼きがある。これは神輿ジョイントの2年後から，ホタテ会が始めたもので，20余年継続している。かつてはこの地域でもとんど焼きが行われていたが，戦後は途絶えていた。地域の高齢者の昔話を聞いたことをきっかけに，ホタテ会が復活させた。地域自治会からの財政的な補助は一切なく，ホタテ会が受け付ける御祝儀だけで運営されている。とんど焼きの火で焼く餅の用意など，かなり経費はかかるが，赤字になることはない。不足しないだけの御祝儀が集まる点に，地域住民の支持や期待が寄せられていることを読みとることができる。

このように，機能集団は現在でも地域自治会とは一線を画して，独自の活動を行っている。中核メンバーも多くはない中，このような活動を支えるエートスはどのような経験によって培われてきたものであろうか。S.K.さんより若い世代のメンバーのN.S.さん（自営業主）は，町組総代を務めていた祖父が地域行事の実施をめぐって，地域の人と激しくけんかするほど真剣に議論していた場面を記憶している。地域にそそぐそのようなエネ

ルギーを子供に伝えていきたいという気持ちが活動の源泉であると言う[11]。また，別のメンバーの M.H. さん（公務員）は，子供の頃の記憶として，一緒に暮らしていた祖母が，起床後毎朝自分に「H，お参りに行くよ」と声をかけ，祖母に連れられて，山王社，天神社，寺院を一緒に回り，拝礼する経験をもっていたことが原点であると語る[12]。このように，町の行事や宗教スポットをよりどころにしていた祖父・祖母の記憶が，活動メンバーには鮮明に残っている。町地区には，神社が 2 ケ所，寺院が 3 ケ寺あり，宗教スポットが豊富で，宗教行事も多い。このような地域社会の特徴と結びついた経験・記憶や，宗教的親和性が，現メンバーの地域社会への愛着の基盤の一部となっている。

9. むすび

祭礼が変容する直接のきっかけを生み出した中核的人物 S.K. さんのライフ・ヒストリーを分析することによって，地域社会にとっては，革新的に思われるアイデアを発想し，実現した S.K. さんの行為やエートスがどのような経験や仕組みに支えられていたのかについて考察してきた。S.K. さんは，活動や企画をともに実現していく「重要な他者」・「同伴者」を各ライフステージにおいて，身近に獲得・配置し，そのような人々と共に，活動を展開させてきたことが明らかとなった。青年の頃から，離島に生きる者として生き方を模索し，複数のアソシエーション集団の活動に活発に関わることによって，「人と人との関係性の資源」を形成・蓄積していた。また，神輿ジョイント実現にあたっては，自営業主層のネットワークを活用することによって，異なる自然村との間の合同イベントの実行が可能となった。以上のように本稿は，中核的人物が，アイデア実現のため重要な資源となった「重要な他者」・「同伴者」を身辺に獲得し，配置していった過程，つまり，パーソナル・ネットワーク分析でいうところのエゴのパーソナル・ネットワーク形成の過程を明らかにすることができた。

そして，その活動は，個人的なパーソナル・ネットワークの範囲にとどまるのではなく，地域社会の社会生活を豊かにする活動につながっていった。機能集団のホタテ会の活動は，現在は地域行事を実施し，地域社会の内実を維持する上で欠かせないものになっている。このように個人のパーソナル・ネットワークの資源配置状況が，地域社会における「Social Capital」「人と人との関係性の資源」に深化していく様相をとらえることができた。また，人的資源が豊かとは言えないが，限定された状況であっても，「人と人との関係性の資源」が形成され，蓄積され，展開していく一面を明らかにすることができた。

以上のように本稿は，個人史と地域社会の構造との連関を詳細に記述することを通して，地域社会の変化の過程を解明することを試みたものである。

(受理日：2004年10月29日)

註

1) 例えば，[有末 1983，1992，1999]，[松平 1980，1990]，[和崎 1976，1996，1999]。
2) [渋谷 2000] は，その一例として，[目瀬編 1990] を挙げている。
3) [福山農業改良普及所 1975：58-59]
4) [福山農業改良普及所 1975：32]
5) 町地区居住者の M.M. さん（男性）へのヒアリング（2004年9月18日）。M.M. さんは昭和35年，高校3年生の時，神輿を担ぎあげた経験がある。翌年から，神輿が担げなくなったと言う。
6) 産業構造的にも田島と横島は異なっていた。横島は昭和30年代半ばまで，産業的には漁業に特化した集落であった。そのため，漁業集落特有の生活慣行や規範が醸成されていたという。一方，田島では，箱崎という枝村の住民が地元で漁業を行っているに留まり，産業的には早くから地元漁業から脱却していた。田島では，戦前から，海外や京阪神など島外へ労働力を送出することに特化した集落（町地区）や，畑作を中心とする農業集落であった。このような産業構造の相違が，それぞれの島の住民の生活慣行の相違，気質・気風の相違を生み出す要因となったと，現在でも両島の多くの人は言ってい

る。内海町ではこのように解釈することが常識化されていたようである。

7）「田島の田なし」は田島には田んぼがなく畑作地のみで貧しいと，横島側が揶揄する表現。「横島の夜なし」は，漁業に特化した横島では，夕方出漁し，明け方に帰ってくるため，夜も寝ずに働くほど貧しいと，田島側が揶揄する表現。

8）以下の記述は，S.K. さん（男性），妻の S.R. さんへのヒアリング（2004 年 9 月 4 日），S.K. さんの母の S.F. さんへのヒアリング（2004 年 9 月 18 日），大浦地区在住の W.H. さんへのヒアリング（2004 年 9 月 10 日）による。

9）町地区居住者の M.M. さん（男性）へのヒアリング（2004 年 9 月 18 日）。

10）横島居住の M.S. さんへのヒアリング（2004 年 9 月 5 日）。

11）町地区居住者 N.S. さんへのヒアリング（2004 年 7 月 24 日）。

12）町地区居住者 M.H. さんへのヒアリング（2004 年 7 月 24 日）。

参考文献

有末賢 1983「都市祭礼の重層的構造―佃・月島の祭祀組織の事例研究」，『社会学評論』132 号（第 33 巻第 4 号）：37-62.

1992「下町の生活世界―重層的都市文化への生活史的アプローチ」，森岡清志・松本康編『都市社会学のフロンティア　生活・関係・文化』，日本評論社，197-222.

1999『現代大都市の重層的構造―都市化社会における伝統と変容』，ミネルヴァ書房。

福山農業改良普及所 1975『田島横島の昔話』，内海町。

金子郁容 1999『コミュニティ・ソリューション』，岩波書店。

松平誠 1980『祭りの社会学』，講談社。

1990『都市祝祭の社会学』，有斐閣。

目瀬守男編 1990『地域資源管理学』，明文書房。

森岡清志 1979「社会的ネットワーク論―関係性の構造化と対自化」，『社会学評論』30 巻 1 号.

小内純子 2002「住民主体の地域形成の試みと自治体―大規模酪農地帯・北海道標茶町を事例に―」，『地域社会学会年報』第 14 集：147-167.

Plath, D.W. 1980 “Long Engagements, Maturity in Modern Japan”, Stanford University Press.（＝1985 井上俊他訳『日本人の生き方　現代における成熟のドラマ』岩波書店。）

渋谷美紀 2000「伝統行事の伝承と地域活性化―岩手県北上市 SN 集落の小正月行事

の事例を中心に—」,『村落社会研究』第6巻第2号:48-59.
鈴木榮太郎 1940『日本農村社会学原理』(=1968, 未来社『鈴木栄太郎著作集Ⅰ, Ⅱ』)。
鈴木広 1975『都市的世界』, 誠信書房。
武田尚子 2002『マニラへ渡った瀬戸内漁民—移民送出母村の変容—』御茶の水書房。
鳥越皓之 1994『地域自治会の研究』, ミネルヴァ書房。
和崎春日 1976「都市祭礼の人類学—左大文字をめぐって—」,『民族学研究』41巻1号。
1996『大文字の都市人類学研究』, 刀水書院。
1999「都市空間と祭祀空間」,『都市社会学』, 有斐閣:157-175.